「ひかりの素足」から「銀河鉄道の夜」へ

――宮沢賢治における地獄を中心に――

横山明弘

一

「ひかりの素足」に関する本格的論文は少ない。

寺田透氏は「『水仙月の四日』と『ひかりの素足』は、かくて、わが国の雪嵐をえがいた文学作品として当然最高のものになったのである。」(注1)とその論文を締括っている。

中村稔氏は「銀河鉄道の夜」との類似を指摘し、「その構成において、自己犠牲を媒介として展望を許されたユートピアという点で同じである。」(注2)と述べている。カムパネルラの自己犠牲による溺死が、銀河のユートピアの旅を可能にし、楢夫の身代わりとして鞭打たれた一郎の行為が、仏を出現させ地獄を極楽に転じさせたことをさしているのであろう。

天沢退二郎氏も「愛する者をそこに置いてひとり主人公が現世へ戻ってくる設定が『銀河鉄道の夜』を予告していることはいうまでもない。」(注3)とやはり「銀河鉄道の夜」との関連に触れている。ジョバンニがカムパネルラを銀河に残し、一郎が楢夫を極楽に残して、現世に戻ってきたということを言っているのである。

この論文においては、宮沢賢治における地獄の問題を中心に、「ひかりの素足」から、「オホーツク挽歌」を媒介として、「銀河鉄道の夜」までをたどりたい。「ひかりの素足」の冒頭に、楢夫が自分の死を予感し、「新らしきもの着せるって云ったか」「湯さ入れで洗ふて云ったか」「みんなしておりゃのごと送って行ぐて云ったか」と脅えて父に尋ねる場面がある。ここに宮沢自身の根源的不安が投影されているのではないかというのが、私の問題意識である。

二

まず「ひかりの素足」の粗筋を追い、主題を抽出しておきたい。

一郎と楢夫の兄弟は父親が働いている山小屋に来ていたが、月曜日から学校へ出るため、父親の知り合いと一緒に家に帰ることになった。

馬をひいた人は炭俵をすっかり馬につけてつなを馬のせなかで結んでから「さ、そいでぃ、行ぐまちゃ。わらし達ぁ先に立ったら好がべがな。」と二人のお父さんにたづねました。「なぁに随で行ぐごたんす。どうがお願ぁ申さんすぢゃ。」お父さんは笑

っておじぎをしました。

一行は歩き始めるが、しばらく行ったところで馬を引いた人達と出会い、大人同士話を始めてしまう。

兄弟はしばらくは、立って自分たちの馬の歩き出すのを待ってゐましたがあまり待ち遠しかったのでたうたう少しづつあるき出しました。

ところが天候が一変し、二人は吹雪の中で遭難してしまう。

風がもうまるできちがひのやうに吹いて来ました。いきもつけず二人はどんどん雪をかぶりました。「わがない。わがない。」

檜夫が泣いて云ひました。その声もまるでちぎるやうに風が持って行ってしまいました。

寺田透氏が評価したように、二人が遭難していくこの場面はすこぶる迫力がある。一郎は毛布をひろげてマントのまま檜夫を抱きしめ、そのまま雪の中に座って気を失ってしまい、夢のような世界を覗く。

そこは源信の『往生要集』に描かれているような世界で、鬼が鞭を振りながら子供達を追っていく。

そして本たうに恐ろしいことはその子供らの間を顔のまっ赤な大きな人のかたちのものが灰いろの刺のぎざぎざ生えた鎧を着て、髪などはまるで火が燃えてゐるやう、たゞれたやうな赤い眼をして太い鞭を振りながら歩いて行くのでした。

鬼に檜夫が打たれようとするのを一郎が庇って、「檜夫は許して下さい、檜夫は許して下さい。」と泣いて叫んだ時、どこからともなく「にょらいじゅりゃうぼん第十六。」という声がかすかにし、ぼうっと黄金いろになった野原を立派な大きな人が歩いてきて、あたりは地獄から極楽に一転する。(注4)

『法華経』の「如来寿量品」には、「功徳を修め、柔和であって、素直であるものは、みなわたくし（仏）の身体がここにあって法を説いているのを見る」(注5)とあるが、一郎の犠牲的行為によって仏が出現したのである。

また『今昔物語集』の道成寺縁起は、蛇になった男女が老僧に「如来寿量品」を書写してもらい、忉利天と都率天にそれぞれ生まれ変わったという「如来寿量品」のご利益を説いた話として有名である。

ところで宮沢自身仏に出会ったということを高農時代、小森彦太郎氏に語っている。

賢治君は時々不思議なことを言って居りました。お観音さまが美しい声で呼びかけたとか、有難いことを教て下すったとか、お釈迦さまに逢ったとか、又小岩井農場に行った時、紫・青・赤・黄などいろいろな色が見え出し、美しい天地だと思えばそう見えるし、テームス川だと思えば、そうも見えるなどとも言っていました。(注6)

さて今まで赤い瑪瑙の刺ででき、暗い火の舌を吐いていた地面は、仏の出現と共に、平らな波一つ立たないまっ青な湖水のような地面に変わり、その上には沢山の立派な木や建物が浮かんでいる。空の方からはいろいろな楽器の音が、光のこなと共に降ってきて、天人達が碧や金のはなびらを落していく。

後に引用するが、「青森挽歌」にも「ひかりの素足」と同様、極楽と地獄が描かれており、特に極楽に関する描写は、この部分に酷似している。両方共湖水の上に立っていると思っていたのに、実は

地面だったと気付く。

そこで貝殻のように白くひかる大きなすあしの仏が一郎に言う。

「お前はも一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほないゝ子供だ。よくあの刺の野原で弟を棄てなかった。あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。」

「銀河鉄道の夜」の「初期形」においても、ジョバンニがセロのような声の大人から、「お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐ歩いて行かなければならない。」と言われている。天上におけるユートピアの存在を知った少年達が、現実空間に復帰して、菩薩行に生きるように説かれているのである。だが一郎は地獄の存在をも知っている点で、異なっている。

中村稔氏は「ある意味では一郎の方がユートピアあるいは極楽をのぞきみる資格をジョバンニよりはるかにもっている」とし、さらに「貧しいということと、孤独だということと……これらが銀河鉄道の乗車券たりえたのか。そうとしか考えようがない。」[注7]と述べている。だがジョバンニは先に見たように、異空間の存在を伝え、「さぁもうきっと僕は僕のために、カムパネルラのためにみんなのためにほんたうの幸福をさがすぞ。」と菩薩行を決意する少年として見い出されて、切符を付与されているのである。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスに拠ると、スウェデンボルグは天国に住む天使と会話を交わしたり、地獄に住む悪魔と議論を戦わせたが、地上に新しい教会を創設するという使命があったからこそ、そのようなことが許されたと述べている。[注8]

ジョバンニも菩薩行を決意し、社会を改良する使命を持つ少年と予見されたからこそ、切符を付与され、異空間である銀河を旅することが許されたのである。

さてずいぶん逸れてしまったが、一郎が眼を開けると、村の人達が一郎を見下していた。だが楢夫は眼を閉じ息は絶え、手や胸は氷のように冷えてしまっていた。

このように読んでくると、宮沢は吹雪で遭難する兄弟を描くことによって、極楽と地獄が存在することを暗示し、『法華経』による救済を信じて、その教えを実践せよと語っているように思えるのである。極めて教化性の強い作品と言える。

三

宮沢はこの作品について、「余りにセンチメンタル　迎意的なり」というメモを残している。次にこの問題について考えてみたい。

山田晶氏は『アウグスティヌス講話』の中で、「聖書の中でイエス・キリストによってさえ救いがたい地獄について語られるところから、キリスト教の神よりも仏の方が慈悲深いとか、キリスト教の神はケチだとかいう結論は出てこない」とし、次のように論じている。

すべてのものを包容するなどといいながら、そこに観念的でセンチメンタルな要素が入ってくるのではないか、「私」のセンチテントに満足を与える「私の神」になっているのではないか。本当の意味でリアルな神の愛は、何もかも無条件に赦すようなものではなくて、或る者たちは容赦なく地獄へつき落とすという、そういう厳しさを含んだものではないか。それは、人

間の愛の観念を超越する側面を有する愛ではないか。……（中略）……そのような厳しさに裏付けられた愛こそは、真実の愛だと思うのです。(注9)

この山田晶氏の思想を援用すると、「余りにセンチメンタル」とは、楢夫の身変わりとして鞭打たれた一郎の犠牲的行為により、仏が出現し、「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの刺のさきの小さな露のやうなもんだ。」と皆の罪が許され、鬼までが泣いてひざまづき、地獄が極楽に一変する安易さのことを言っていると思われる。

そして人間の持っている罪が簡単に許されることは、皆の願望であるから、そのように描いた点を「迎意的なり」と言ったと考えるのである。

ところで宮沢の地獄に関するイメージを書簡から見ておきたい。大正十年、友人である保阪嘉内に国柱会に入信することを強く迫った書簡である。

立ち入って失礼ですが以下どうか怒らないで下さい。苦しも万一道を求める人がそれを求め得てどうにか自分の為にせうと思ふなればその人は求めようと努める程頭が破れる様に痛みます。全体私共に今そんな見懸けや、お芽出たい喜びやを求める暇がないのです。すぐもう私共一同の前に、鋭い感覚を持った生物が、数万度の高熱の中に封ぜられ一日に八万四千回悶きながら叫び乍ら生れ、死に、生れ死にしなければならないといふはっきりした事があるのです。「何だ地獄か。」といふ人は先づ静にお前さんの頭がどんなに痛みどんなに忙しく灼けた鉄板の上をはねまはってゐるかを観察するがいゝのです。(注10)

そしてその地獄から逃れるためには、『法華経』を信じるしかないと言うのである。

あなたは今この次に、輝きの身を得、数多の通力をも得、力強く人も吾も菩提に進ませる事が出来る様になるか、又は涯無い暗黒の中の大火の中に堕ち百千万劫自らの為に（誰もその為に益はなく）封ぜられ去るか二つの堺に立ってゐます。間違ってはいけません。この二つは唯、経（この経）を信ずるか又は一度この経の御名をも聞きこの経を読みながら今之を棄て去るかのみに依って定まります。かの巨なる火をやうやく逃れて二度人に生れても恐らくこの経の御名さへも今度は聞き得ません。この故に又何処に流転するか定めないことです。保阪さん。私は今泣きながら書いてゐます。(注11)

ここには山田晶氏が言っているような厳しい宗教観が語られている。

また関登久也氏の「賢治素描」には、父政治郎氏の親友であり、当時花巻仏教会の第一人者であった真宗の大信者阿部晃と法論を戦わせ、結着がつかず別れる際に、『法華経』を無視することは堕地獄の根源であると言ったということが、記されてある。先程の書簡の二・三年前にあたる宮沢二十三・四の頃である。

『法華経』の「譬喩品」には、『法華経』を非難する者やこの経を読誦し、書き、保持する者を賤しめる者は、命が終われば阿鼻地獄に入り、ある非常に長い年数の間そこにずっといて、その年数が尽きても、またそこに生れ、ぐるぐると地獄の中を巡り、数えきれない年数に至るであろうと語られている。(注13)

山田晶氏は先の著書で、おそらく恵心僧都が横川の道場で観念三

味にふけっていた時、恐ろしい地獄の様相をありありと見たのであろうと言っているが、宮沢も幻覚体験が多かったことから、地獄の描写は単なる教化のための方便ではなかったと思われる。父に激しく改宗を迫ったのもこのような事情があったからだと推測する。

どの宗教でもおしまひは同じ処へ行くなんといふ事は断じてありません。間違った教による人はぐんぐん獣類にもなり魔の眷属にもなり地獄にも堕ちます。今回は私も小さくは父母の帰正を成ずる為に家を捨てゝ出京しました。（大正十年三月十日宮本友一あて）

先の小森彦太郎氏の「高農時代の賢治」に拠ると、宮沢が妹のくに子の縁談の取り決めのため、下閉伊に行った帰り、宮古街道をトラックに乗せてもらい走っていたところ、危険な予感に襲われ、体の小さな青鬼だの赤鬼だの白い鬼だのが目先にチラチラ浮かんできた。トラックを止めてくれるように運転手に頼んだが、大丈夫だとばかり止めてくれない。鬼どもは大きくなったり小さくなったり、ますます踊り狂っている。ひょいと谷底を見ると、そこに一丈ばかりもある大きな掌が、さんさんと光を放ってトラックを支えている風である。宮沢は「観音さまの御手だな」と思った。しばらく走って、トラックが急なカーブにさしかかった時、宮沢は思はず大きな声で「危い！」とどなり、間髪を入れず運転手と一緒にトラックから跳び下りていた。トラックは谷底へ落ちたという。(注14)

桑原啓善氏が宮沢の友人であった森荘已池を訪問した時、宮沢と会うとたいてい鬼神の話が出たということを聞いている。(注15)だが宮沢家ではこのことはタブーであり、宮沢も生前父親から怪力乱神を語るなと強く戒められていた。

さて、地獄に封ぜられるのを免れるためには、『法華経』を信じるしかない、保阪よ、入信せよ、というこの書簡の内容は、「ひかりの素足」で読みとった思想の骨格とほとんど同じであると言って良い。書簡が書かれたのが大正十年、宮沢が二十五歳で、無断上京して国柱会本部を訪れた年であるから、「法華経」信仰が最も高揚していた時期である。「ひかりの素足」の成立年代は不明だが、使用されていた原稿用紙は、大正十一年頃のものとされており、この書簡との思想的関連を考慮すれば、この作品もおそらくこの時期に成立したと考えられる。

四

異空間の存在を認めるという宮沢の特質は、常識的には理解困難な問題だが、この点を抜きにして、宮沢の文学や思想を追求していくことは不可能なのである。どうしてもここに行きついてしまう。

十八歳の時に島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』特に「如来寿量品」を読んで、身ぶるいする程の感動を受けたというのは、仏が常住しているという思想に感銘を受けたためではないだろうか。先に述べたお釈迦さまに出会ったというような幻覚体験と「如来寿量品」の思想が、合致したと考えるのである。さらにこの幻覚体験が、輪廻転生への信仰を強化したということも、容易に推測できる。天界や餓鬼界が見えるのだから。

総ての生物はみな無量の劫の昔から流転に流転を重ねて来た。流転の階段は大きく分けて九つある。われわれはまのあたりにその二つを見る。一つのたましひはある時は人を感ずる。ある時は畜生、則ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上

にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。則ち友人や恋人や兄弟や親子である。それらが互にはなれ又生を隔ててはもうお互に見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。異教の諸子はこの考えをあまり真剣で恐ろしいと思ふだろう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ。（「ビヂテリアン大祭」大正十二年頃）

現世での自分の行為が来世を規定するという思想が真実ならば、確かに恐ろしいといえる。

聖者たちから直観され（以下不明）／古い十界の図式まで／科学がいまだ行きつかず／はっきり否定もできないうちに／たうとうおれも死ぬのかな／いま死ねばいやしい鬼にうまれるだけだ

（「あかるいひるま」）

この詩は「春と修羅　詩稿補遺」にある詩で、成立年月日は不明である。だがこのように見てくると、青年時代の宮沢に流転への畏怖が秘められていたということは、最早疑いのない事実であろう。宮沢は釈尊のように輪廻を断とうとしたのである。

五

大正十一年、宮沢は最愛の妹トシを失う。トシは肺結核のため、十一月二十七日夜、二十四歳の若さで死去した。宮沢二十六歳の時である。その日の日付で「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三つの詩編を残していることは、あまりに有名である。

トシの死後、宮沢は当然その行方を尋ね始める。

かんがへださなければならないことは／どうしてもかんがへださなければならない／とし子はみんなが死ぬとなづける／そのやりかたを通って行き／それからさきどこへ行ったかわからない／それはおれたちの空間の方向ではかられない／感ぜられない方向を感じようとするときは／だれだってみんなぐるぐるする。

（「青森挽歌」一九二三年八月一日）

そして天に生まれてくれたか、もしかしたら地獄に生まれているのではないかと不安に駆られ、それぞれを想像してみる。

そこに碧い寂かな湖水の面をのぞみ／あまりにもそのたひらかさとかがやきと／未知な全反射の方法と／さめざめとひかりゆすれる樹の列を／ただしくうつすことをあやしみ／やがてはそれがおのづから研かれた／天の瑠璃の地面と知ってこゝろわなき／紐になってながれるそらの楽音／また瓔珞やあやしいうすものをつけ／移らずしかもしづかにゆききする巨きなすあしの生物たち／遠いほのかな記憶のなかの花のかをり／それらのなかにしづかに立ったろうか／それともおれたちの声を聴かないのち／暗紅色の深くもわるいがらん洞と／意識ある蛋白質の砕けるときにあげる声／亜硫酸や笑気のにほひ／これらをそこに見るならば／あいつはその中にまっ青になって立ち／立ってゐるともよろめいてゐるともわからず／頬に手をあててゆめそのもののやうに立ち／（わたくしがいまごろこんなものを感ずることが／いったいほんたうのことだろうか／わたくしといふものがこんなものをみることが／いったいありうることだろうか／そしてほんたうにみてゐるのだ）と／期ういってひとりなげくかもしれない……

（「青森挽歌」）

さらに障害を破って知らせてくれるように呼びかける。

とし子、ほんたうに私の考へてゐる通り／おまへがいま自分のことを苦にしないで行けるような／そんなしあはせがなくて／従って私たちの行かうとするみちが／ほんたうのものではないならば／あらんかぎり大きな勇気を出し／私の見えないちがった空間で／おまへを包むさまざまな障害を／衝きやぶって来て私に知らせてくれ。　（「宗谷挽歌」一九二三年八月二日）

トシの死が原体験となって、「銀河鉄道の夜」に大きな影響を与えたことは、様々に論じられているが、その点を詩編を通して明らかにしておきたい。先に私は拙論「『銀河鉄道の夜』の主題」を書いたが、その時不用意にカムパネルラはザネリを助けようとして溺死し、霊となって丘で孤独にうちひしがれているジョバンニの所へ行って、銀河の旅に誘い出したのであると書いた。(注16) 他の論文ではここは単にジョバンニの夢となっているだけなのである。だがもし単なる夢であるとすれば、「すぐ前の席に、ぬれたやうにまっ黒な上着を着たせいの高い子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気が付きました。」（傍点引用者）という描写は、出来すぎてはいないだろうか。ジョバンニはカムパレルラが溺れ死んだことを知らない筈である。やはり溺死したカムパネルラの霊が、ジョバンニの夢の中へ出現したと考えたいのである。

ではこの仮説を補強するための資料を挽歌から挙げてみることにする。

とし子とし子／野原へ来れば／また風の中に立てば／きっとおまへをおもひだす／おまへはその巨きな木星のうへに居るのか／鋼青壮麗のそらのむかふ／（あかけれどもそのどこかも知れない空間で／光の紐やオーケストラがほんたうにあるのか／……此処あ日あ永あがくて／一日のうちの何時だがもわからないで……／ただひときれのおまへからの通信が／いつか汽車のなかでわたくしにとどいただけだ）（「風林」一九二三年六月三日）

わたくしたちが死んだといって泣いたあと／とし子はまだまだこの世かいのからだを感じ／ねつやいたみをはなれたほのかなねむりのなかで／ここでみるやうなゆめをみてゐたかもしれない。そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が／つぎのせかいへつゞくため／明るいいゝ匂のするものだったことを／どんなにねがふかわからない／ほんたうにその夢の中のひとくさりは／かん護とかなしみとにつかれて睡ってゐた／おしげ子たちのあけがたのなかに／ぼんやりとしてはひってきた／《黄いろな花と　おらもとるべがな》／たしかにとし子はあのあけがたは／まだこの世かいのゆめのなかにゐて／落葉の風につみかさねられた／野はらをひとりあるきながら／ほかのひとのことのやうにつぶやいてゐたのだ　（「青森挽歌」）

私が夜の車室に立ちあがれば／みんなは大ていねむってゐる。その右側の中ごろの席／青ざめたあけ方の孔雀のはね／やはらかな草いろの夢をくわらすのは／とし子、おまへのやうに見える。　（「青森挽歌三　一九二三年八月一日）

とし子が私を呼ぶといふことはない／呼ぶ必要のないとこに居る。もしそれがさうでなかったら（あんなひかる立派なひだのある／紫いろのうすものを着て／まっすぐにのぼって行ったのに。）もしそれがさうでなかったら／どうして私が一緒に行ってやらないだろう。　（「宗谷挽歌」一九二三年八月二日）

これらの詩編から必要事項を抽出すると、汽車の中でトシからの

通信が、ひときれ届いたこと、死後すぐにトシがおしげたちの夢の中に現われたこと、夜汽車の中でトシに似た女性を見たこと、トシの行方を案じて一緒に行ってやりたかったこと、これらの宮沢の原体験が、まちがいなく「銀河鉄道の夜」に投影されていると思うのである。つまりカムパネルラがザネリを救おうとして溺死し、その後すぐにジョバンニの夢の中に現われ、一緒に銀河（死後の世界）を旅するという内容にである。

ここでも妹トシが地獄に流転したのではないかという畏怖が、「銀河鉄道の夜」を書かせた深源の一つであるということを確認できるのである。

（註1）寺田透「宮沢賢治の童話の世界」文芸読本『宮沢賢治』所収、河出書房新社、一九七七年、四七頁。

（2）中村稔『宮沢賢治』筑摩書房、一九七二年、一四一頁。

（3）天沢退二郎『新修宮沢賢治全集第八巻』「ひかりの素足」の解説、一九七九年、三三九頁。

（4）中村元氏に拠ると源信の『往要要集』が、「地獄」と「極楽」の対比的観念を日本人に与えたという。

（5）『法華経現代語訳(下)』三枝充悳訳、第三文明社、一九七四年、三八十頁。

（6）「イーハトーヴォ」復刊No.4宮澤賢治の會、一九五五年。

（7）前掲書（2）、一四一頁。

（8）ホルヘ・ルイス・ボルヘス『ボルヘス、オラル』木村榮一訳、風の薔薇、一九八七年、八三頁。

（9）山田晶『アウグスティヌス講話』新地書房、一九八六年、七二～七三頁。

（10）『校本宮澤賢治全集　第十三巻』筑摩書房、一九七四年、一九八頁。

（11）同書　二百十六頁。

（12）前掲誌（6）第八號、一九四十年。

（13）『法華経現代語訳（上）』一三三頁。

（14）前掲誌（6）復刊No.5一九五五年。

（15）桑原啓善『私見宮沢賢治・その外』国文社、一九八六年、十三頁。

（16）「人文科教育研究XIV」所収、筑波大学人文科教育学会、一九八七年。

（淳心学院中・高等学校教諭）